

スポーツは「良い子」を育てるか？
Does a sport bring up good children?

1K09B1905

指導教員 主査 木村 和彦先生

松原 里英

副査 吉永 武史 先生

【はじめに】

「良い子」という言葉は言葉の受け取り手によって様々な解釈があり、またこの言葉の使用の際の対象者によってもかなり異なってくる。そこで本研究は「良い子」とは「成長した心身を持つ人間」と定義づけをした。さらに、前記もしたが、永井（2004）があげている成長した心身を持つ人間の要素のうち、『スポーツマンシップがある』『ルールを順守する』ということが出来ているかを本研究での「良い子」と定義づけすることとする。

スポーツは人に大きな影響を及ぼすことの出来るツールである。それはスポーツを実施する人間の年齢にも関係する。成人した者にとってのスポーツの目的は「体力向上」「健康維持」「ストレス発散」などといった目的がほとんどであろう。一方でまだ成人していない子供たちにとってのスポーツは「人間形成」「協調性を学ぶ場」として捉えられている場合が多く、実際にスポーツを通して仲間と協力することの大切さ、困難に立ち向かう勇気を持つことの大切さ、自分自身を追いつめ、また努力をする楽しさを学ぶことが出来る。

しかしながら、最近では子供のスポーツの世界でも勝利至上主義が叫ばれ、親たちは自分の子供がスポーツによって有名になることを夢見て、前述した、『スポーツを通して学べること』を学ぶ以前に結果にこだわらせてしまっており、スポーツをやっているだけで前述したような力が身に着くと考えている親がいるのもまた事実である。

また「スポーツは『良い子』を育てるか？」では、勝利の為に禁止されているドーピングに手を出してしまい、厳しい処分をされる選手の話が描かれているが、現在、スポーツの世界でもルール順守が叫ばれており、今までであったら平然と蔓延っていた「ルール違反」が厳しく取り締まられている。したがってルールを守るという考え方がスポーツ界で生きていくうえで必要であることがわかる。

そこで本研究は、あるスポーツの実施強度と、そのスポーツを実施している人たちが” スポーツマンシップがあるか”” ルールを順守するか” という傾向に相関性があるかを明らかにすることを目的とした。

【研究方法】

早稲田大学ラグビー蹴球部の選手 31 名と早稲田大学公認サークル「早大こんぷれっくす」所属の 30 名を

対象に、質問紙による調査を行った。調査票の各項目については一元分散分析において、ある因子と各質問項目の平均値を算出した。

【結果と考察】

今回の調査対象であった部活生は確かに高い強度でスポーツを実施している団体であり、スポーツマンシップの項目に関しては、スポーツマンシップに反する行動をとるものは少ない。実際に今回の研究においても、自分の成功をひけらかしたり、負けてしまった場合に審判のせいにしたらず、あまり高い強度でスポーツを実施していない人たちに比べると自分にベクトルを向けていることがわかった。

高校時代の戦績の比較では、「宿題をやる」という項目だけは高戦績者と低戦績者の得点に少しばかり差が出て、高戦績者の方が宿題をやるという傾向にあることがわかった。部活動の練習と勉強に追われていた者は時間の使い方が上手だ、ということである。普通であれば物思いにふけて過ぎてしまう時間でも、常に時間に追われている人はその隙間時間をうまく有効活用することができるといえる。

スポーツにおける場面においては、低戦績者の方が、自分の活躍を大げさにひけらかしたり、相手の野次に便乗したりしやすいという結果が出て、高戦績者たちは常に自分にベクトルを向けているといえる。

【まとめ】

スポーツにおいては実際にスポーツマンシップに則った行動をしているという結果が出た部活生だが、一歩スポーツから離れてしまった彼らが日常生活においても同様に紳士的にふるまっていると言い切ることが出来ないのが事実である。そこで、子供のうちから正しい教育をし、しっかりとした日常のルール順守をしたうえで初めてスポーツにおける勝利が成り立つのだということ子供たちに教えていかなければならないと考える。子供を取り巻くスポーツ環境が、子供を取り巻く教育者たちの意識改革がなされない限り、スポーツが教育にいい影響を及ぼさないという方程式が認識されることになり、ますますスポーツ離れが進むこととなるであろう。

【主な参考文献】

永井洋一, 2004, スポーツは良い子を育てるか, 生活人新書